

～今月の読み物～

バックカントリーとは？

村井 大

「休みの日は何をしていますのですか？」と聞かれると「山です」と答えている。正確には「山を登り、スノーボードで滑って降りる」だが、説明するのがめんどくさいのでそう答えている。11月～6月の週末は、ほぼ山へ通う生活をしており雪が無い時も冬の下見の為に山へ通う日々だ。恐らく周りの人からは変人に見られているかもしれない(笑) そんな変人の私の趣味である「バックカントリースノーボーディング」を紹介したい。

「バックカントリー」と聞いてピンとくる人は少ないかもしれない。冬になるとよくニュースで「スノーボーダーが雪山で遭難しました」とか「雪崩に巻き込まれて死亡しました」とか「ゲレンデ外滑走して行方不明です」などと言われているものだ。正確にはゲレンデ外滑走とは違うのだが、恐らく世間一般では同じ括りにされている。

「ゲレンデ外滑走」と「バックカントリー」の違いは話すと長くなるので割愛させて頂く。単純に自分の足で歩いて登って、スノーボードやスキーで滑って降りてくる遊びだと思っていただければいい。

普通に考えれば「滑りたいならリフト使ってゲレンデ滑ればいいだろう」と思うだろうが、週末のゲレンデはリフト待ちがあり、コースも人で溢れ返っている。ストレス発散どころか逆にストレスをため込んでしまう状況になる。しかも帰り道の高速道路渋滞はお約束となっている。貴重な休日をそんな事の為に潰すわけにはいかない。

そのような状況で、のんびりゆっくりスノーボードを楽しむには、人が居ない所へ行く必要がある。そうすると必然的にゲレンデでは無く「雪山」を目指す事になる。

「雪山」では多くの方はパーティーを組み数人で行動するが、私は単独行動が多い。装備も多くなりリスクも高くなるが、やはり単独が一番動き易い。好きな時に休み、好きなだけ歩いて滑る事が出来る。なによりも最悪の事態の時に悲しい思いをしなくてすむ。雪崩に巻き込まれて自分が死ぬのは構わないが、一緒に行った仲間が巻き込まれ死ぬのだけは見たくない。

「雪山」を目指すのだから、装備も当然必要になる。ゲレンデにはパトロールがいて怪我したら助けてくれるし、コースで迷っても看板が出ている。レストハウスには食事があり自動販売機もある。山にはそんなものは一つも無く、全て自分で用意しなくてはならない。背中にはフル装備(10キロ前後)の常に重たいバックパックを背負う事になる。はっきり言って苦行だ。

装備の中でも特に重要なのが「雪崩ビーコン」と呼ばれているものだ。スマホぐらいのサイズで常に



電波を発しており、その電波を探って雪崩埋没者を探す事ができる。搜索範囲はおよそ40m前後のものが多い。このビーコンが無いと埋没者の搜索はかなり難しく、最悪の場合は雪解けまで発見されない可能性もある。単独行でもビーコンを装備しているのは、他のパーティーが雪崩に巻き込まれた時の救助活動の為と、自分が巻き込まれて死んだ時に遺体の早期発見の為である。やはり家族は心配するだろうし、搜索活動をする人達に手間をかけさせたくない。他にもシャベル、ゾンデ、スノーソーなどなど色々必要になってくるが、書き上げるときりがないのでまた次の機会にでも。

「雪山」でのリスクはやはり雪崩だろう。スノーボードで滑る事が目的なので、雪崩れそうな斜面は私にとって気持ち良さそうな斜面に見える。また沢地形は逃げ場がなくハイリスクだが滑るのは最高に楽しい。雪崩れるかどうかは100%見抜く事は不可能だが、ある程度は勉強すると予測がついてくる。

色々な方法があるが、難しい専門用語だらけなので割愛する。ただ闇雲に登って滑るのではなく、自分の経験とその時の雪のコンディションによって判断している。コンディションが悪い時は、登っている途中で引き返す事もあるし、目的とした斜面を滑れない事もある。たとえ他の人がその斜面を滑っていても、不安要素がある時は「撤退」する勇気を持つ事が、雪崩にあわない秘訣だと思っている。なんて偉そうに言っているが、自分が原因で雪崩を起こした事もあるし、雪崩の巣に突っ込んで行った事もある。未だ雪崩に巻き込まれていないのは、ただ運がいいだけだと思う(笑)

他にも視界不良による道迷いや、割れた沢に滑落や、立木への衝突など、様々なリスクが存在する。はっきりいうとリスクだらけだ。そのリスクをいかに減らせるかが私の永遠のテーマでもある。

「雪山」を歩いて登るという事は相当きつい。厳冬期は新雪が積もり自分の腰や胸ぐらいの新雪をかき分けて歩く事になる。これをラッセルという。私はスノーボーダーだが、板はスプリットボードを使っている。これは歩く時は2つに割れてスキーになり、裏に滑り止めをつけて登る事ができ、滑る時は合体させてスノーボードになるという素晴らしい道具だ。この道具でラッセルしていくのだが、背中に10キロの荷物を背負い、一歩踏み出すごとにズブズブと雪に沈んでいく状況を考えてほしい。氷点下の中、額からは汗が垂れてきて、5分もしないうちに息は上がってくる。どんな筋トレよりも辛い作業だ。パーティーで行けば先頭を交代しながら行けるが、単独の私は変わってくれる人がいない。そう、延々とラッセル地獄にはまっていくわけだ。キツイのだけどこのラッセルは心を「無」にしてくれる。普段生活していると常に色々と考え事をしてしまう。会社の売り上げや、資金繰り、人間関係などなど。ラッセルしている間は何も考えずに、ただ前に進むという行為を愚直に繰り返すだけになる。最高の瞬間だ。



単独でラッセルをしていると、後ろから追いついてきた人と交代しながら進む事がある。全くの他人だが、目的は同じなので妙な連帯感が生まれる。なかにはツワモノが居て、先頭ラッセルを延々となす者もいる。そんな時は必ず「ラッセルありがとうございました」と一言お礼を言う。逆にお礼を言われる事もある。持ちつ持たれつだ。

簡単に書いてみたが要するに「バックカントリー」とは高いお金を払って色々な装備を揃え、背中に重い荷物を背負い、辛く苦しい新雪の斜面を自分の足で登り、いつ雪崩れるかわからない斜面を冷や冷やしながらかつてスノーボードで滑り下りるというよくわからない遊びだと思う。

5時間かけて登っても、滑るのはせいぜい15分程度だ。はっきりいって正気の沙汰とは思えない。周りでやりたいという人が居れば、私はまず装備はレンタルで、ガイドツアーに入る事をお勧めしている。ビーコンだけで4万以上するし、色々揃えると10万は軽く超える。はじめはレンタルで十分だ。ガイドツアーは安全をお金で買うと思えば安いものだ。ガイドツアーが100%安全という事は無いが、それでもかなりのリスク回避になるだろう。

私の冬の行動パターン

11月は雪の便りが聞こえてきてオープン前のゲレンデに登ったりする。

12月～3月は新雪を探して各地の雪山へ

4月は日が長くなり行動時間が長く取れるロングルートへ出かけ

5月～6月は残雪が残っている春山で過ごす。

こんなサイクルで毎年過ごしている。

辛い事や怖い思いが沢山あるが、それでも続けているのはきっとそれに勝る何かが雪山にはあるのだろう。この暑い時期でも雪が降り色々な斜面を滑る姿を想像しながら冬を待っている。